

高岡智空

挿絵●魁李

抜きコキ♥

# ハニトラ エステ

*Nude & Nuts Honeymoon Esthetic*



第一章	ライバル店オーナーの濃厚エステ	006
第二章	籠絡エステの虜	076
第三章	新設・マゾ店長調教コース	105
第四章	トラップ回避のご褒美	163
第五章	最後のトラップ	209
エピソード		274

Naki & Koki Honeytrap Esthetic

## 登場人物紹介



こだまりおん  
◆遠峰合理音◆

ライバル店「Snow White」のオーナー。大学卒業と同時に店をオープンさせた。実家は資産家、本人も商才を持ち、エステの腕も素晴らしい。



しいなみどりこ  
◆椎名碧子◆

エステ店「Cinderella」の元の店長の孫娘であるスタッフ。お嬢様育ち。垂れ目でおっとりした振る舞いが、エステやマッサージの腕は確か。



くろかわしずな  
◆黒川静菜◆

「Cinderella」のスタッフで学生。充の学校の後輩であり、エステティシャンを目指している。脚が綺麗な小悪魔キャブ。



さくらだみつる  
◆桜田充◆

「Cinderella」の若店長。入社当初は潰れかけだった店の数字を回復させ、スタッフたちからも一目置かれている。

「——充さん、少々よろしいでしょうか？」

と——そこに来てようやく、充の苦悩に気がついてくれたのか、理音が充の顔を振り返るようにして話しかけてくる。

「お伝えし忘れておりましたわ。どこか『刺激の物足りない箇所』がおありでしたら、遠慮なくお申しつけくださいな。それに、どのような施術をご希望か、ということも添えていただけますと、非常に助かりますので——よろしくお願ひしますね♥」

「——つつ……そ、それって、つまりつつ……あぐつ、くつ……くうんつつ……」

具体的に問い返そうとした瞬間、それを窘めるように、理音の爪が久方ぶりに乳首を摘み扱いた。その刺激だけで上半身すべてが痺れ、官能の波が広がり、尿道口をこじ開けて先走り汁がブユッと噴き上がる。その刺激が誘い水となり、充はもはや先の言葉の意味を確認しようともせず、本能のままに口を開いていた。

「さ、さつきみたいにいっ……くうつつ……ぼ、勃起の処理を……して……ください……もう、ずつと……気になつて、やばいんですうつつ……はあつつ……」

その瞬間——充からは見えない位置で、ニヤリと口端を歪めた理音は、わざとらしく小首を傾げ、困ったように微笑む。

「まあ、そんなことを仰るだなんて♥ エステの施術で、という意味だったのですけれど……まさか、そんなご要望をお客様からされるなんて、思ってもみませんでしたわ」

周囲からもあからさまな嘲笑を浴びせられるが、もはやなりふり構ってはいられなかつ

た。そんな充の反応を見抜いたように、理音は愉快そうに口を開く。

「では——充さんのはしたないオチンポを、どのように扱えばよいのか……具体的な指示をお願いできますか？ 『わかりやすく』ご説明くださいね？」

「し——扱いてくださいつつ、さつきみたいに全員で扱いてええつ！ オイルでグチョグチョにしてつ、乱暴に扱いてくださいつつ……いひあああああつつつ!!」

屈服するように叫んだ瞬間、全員の手が一斉にペニスへ集まってくる。五本の手が互い違いに絡みつき、揉み捏ねるような刺激を与えながら、包皮を剥き上げてアロマオイルを馴染ませ、泡立つほどに激しく扱き上げた。

「本当に、困ったお客様ですこと……ここはエステサロンだと、ご理解くださっているのですか？ そういった行為をお客様から求められるのは、非常識なのですよ？」

「んっあああああつつ！ だ、だつて、さつきはあああつつ、んぐううつつつ！」

反論しようと叫ぶが、舌も頭もまるで回ってくれない。快感で充の口を塞いだ理音は、嘲笑うような調子をさらに強くして、それでいてあくまでも淡々と告げる。

「先ほどは教材をお願いしましたけれど、いまはお願いしておりません。せつかく処理したものを、また節操なく勃起させた——そんな充さんの勝手な行為を、私どもが仕方なく処理して差し上げているのです。迷惑をかけているという自覚はございますか？」

「あひいいいっつつ！ ひぐつつ、んんうううつ、あいつ、はひいいいっつつ！」

冷たくなじられているというのに、その言葉すら快感へと変換されていた。ガクンガク

ンと腰を跳ねさせて快感を貪りながら、彼女たちの手の感触に酔いしれ、充は完全に抵抗を放棄している。もはや充の指示は必要なく、彼女たちはペニスを握るのは別の手で、睾丸を一つずつ揉み転がし、肉笠の裏側を掃除するようになぞり上げていた。指先は尿道口を挟り、裏筋にも爪を添わせ、カリカリと引つ掻いて刺激を与えてくる。

(イクツツ……あああつ、イクツ、もうイけるこれええつつ……くおおおつつ！)

瞬く間に絶頂へ追い上げられた充は、睾丸がせり上がり、ドクドクと脈打って精液が込み上げるのを感じる。だが、もつと欲しい——貪欲な劣情に溺れた充は、先ほど味わわれたばかりの快感を思いだし、懇願するように叫んでいた。

「理音さんっ、理音さんっ……さ、さっきみたいにつ、してつつ……乳首つつ！ 乳首も、いっぱい弄ってくださいいいつつ！ イクとき、乳首いいつつ！」

「——はいはい、お望みのままに。乳首射精の快感、刻み込んであげますわ♥」

半ばまで精液が込み上げたとほぼ同時、尿道口を穿っていた手が離れ、充の乳首に深く爪を立てる。そのまま螺旋を描くようにグリグリと胸元へ食い込まされた鋭い刺激に、充はひと際大きく声を張り上げ、ブリッジのごとく腰を高く浮き上がらせた。

「あぐつつあああああつつ!! はああつ、イグツツ、イグツ、イグうううつつ!!」

——ドビュルウウウウ……ツツツ!! ドクツ、ドクツ、ドクツ……ドビュ……ツツツ! ドプツツ、ドビュルツ、ビュルウツツ! ビクツ、ビユツ、ドピユウツツ!

散々焦らされ、やり場のない快感だけが肉棒と睾丸に蓄積した反動なのか、先ほどの比

ではないほど大量の白濁が打ち上がる。特有の生臭さを撒き散らし、彼女たちの手や指はもちろん髪や腕にまで飛び散って、白い斑点を刻んでゆく。

「あつ、きゃあつ♪」「さつきより、勢いも量もすごいわ……」「理音さんに怒られてたのに?」「だから、じゃないの?」「ああ、道理で……すごい蕩け顔だもん♡」

挿入する女性たちの言葉を受け、乳首を抜きながら理音が囁いてくる。

「ふふふ、たつぷりだせましたねえ……二発目のほうが多いだなんて、本当に困ったチンポをお持ちなのですから、充さんときたら♡」

射精中にも扱かれる、その刺激によつて精液は込み上げ続け、二度や三度どころでは済まないほど、繰り返しの射精が続けられた。ペニスの内側を駆け上がる快感に、身体はどこまでも熱く蕩けさせられ、その状態でオイル塗れの乳首を扱かれると、そちらまでがペニスにされてしまったかのように錯覚してしまう。射精の噴出に合わせて乳首を摘まれ、引っ張り上げられると、その刺激に胸が熱く痺れ、激しい肉悦が刻み込まれる。

「うふふつ……いまはどちらでイッてるのかしら? チンポ、それとも乳首?」

「うあつ、わつ、わがつつ……ああああつ! わがらつ、ないいつ……んくうつ!」

射精する快感に乳首が勃起し、その乳首を抓られる快感で射精が続く。快樂のスパイラルに肉棒は萎えることなく、彼女たちの手の中でひたすらに揉みしだかれ、ペニスも指もすべてが牡臭と白濁に包まれていた。

(はあつ、はあつ……やっっちゃまった……けど……うっ、ぐううっ……す、げえつ……)

まさに、すべてをだし尽くした——と。そう思えるほどの快感が収まり、ようやく射精が終わったところで、充は感極まったように大きなため息をもらす。けれど——。

「あ——えっ、ああっつ!! ま、待つて、ちよつと……うくううっつ!!」

先ほどの処理と同じく、完全に射精が終われば扱くのも止まると期待していた充は、射精直後のペニスを襲う痛烈な刺激に、悲鳴を上げて身悶えた。

「なにつっ、してええっ……あぐっつ、ストップ! もういいですっ、からっ……」

慌ててそう制止するが、絶え間ない刺激で射精後も勃起し続けていたせいか、彼女たちは妖艶な笑いを響かせながら、ペニスへの刺激を止めようとはしない。いまだ硬いペニスを延々と扱き、特に敏感な亀頭を捏ね練り回し、尿道を穿ってくる。

「ここからが、本当の快感ですわ♥ 自慰行為などでは決して味わえない、射精直後の快感というものを——充さんの節操なしチンポに、施術して差し上げます♥」

クスクスと笑いを浮かべた理音の指示のもと、全員の動きは射精中——射精前と同じくらいに激しく、敏感なペニスを弄ぶ。度の過ぎた快感はもはや拷問であり、過敏なペニスへの刺激に慣れているはずもない充は、恥も外聞もなく泣き叫んでいた。

「ああああっつ!! 止めてっ、止めてええっつ!! ひぎっつ、いひああああっつ!!」

「少々お声が大きいですね……失礼ですが、塞がせていただきますわ♥」

そう呟いた理音の尻房が、再び充の顔を塞いでのし掛かってくる。その懐かしい圧迫感と甘い香りに包まれ、天国と地獄を同時に味わう心境に至りながら、充は激しく腰をわな





なかせ、込み上げる感覚に恐怖すら感じていた。くすぐったく、痛く、どこか怠さのあるペニスへの強烈な刺激。そこから逃れたいはずなのに、無理やり流し込まれる快感に肉棒の根元がゾクゾクと震え、痺れるような感覚がジワジワと広がってくる。

(んぶつつ、くふううつつ……こおつ、これええつ……な、なにかつ、くううつ……)

呻きながらも腰は快感に跳ね、まるで射精直前のような動きを見せているのがわかる。だが、射精しそうになる感覚とはどこか違う——いったいなにが起こっているのか、その先へ踏み込むことを恐れ、充は必死に逃れようとしていた。

けれど、快感を伴う責め苦で脱力した身体は言うことを聞かず、彼女らの身体で簡単に押さえつけられ、もはやできることは、込み上げる感覚に身を任せることだけ。

「さて、そろそろですわ……充さん、どうぞ心ゆくまでご堪能くださいませ♥」

理音がそう告げた瞬間、根元からせり上がってきた奇妙な感覚が、先端で弾ける。

——ビュクンツツ……プッシャアアアアツツッ！ プシュツツ、プシャアアアツ！

「きゃはあつつ♪」「出ましたね、お潮……ふふつ、とつても素敵です♥」

「初めて見た……ふふつ、敗北宣言って感じ」「この瞬間は、いつも格別ですわ♥」

その声を聞いて充が感じていたのは、これが射精ではないことと——どこか放尿のような感覚に似ているということだった。だが、放尿でないということだけは確かだ。

亀頭の先がジンと痺れ、感覚がなくなっただけのように弛緩させられている。けれど、そこから噴き出す熱い飛沫が溢れるたび、尿道の奥に電流のような快感が駆け抜け、腰がみ

つともなくバタバタと跳ね躍った。その状態で、無防備なままの亀頭をさらに激しく擦られると、自分の意思とは関係なく、延々と進りを搾りだされてしまう。

そのものもたらず快感に呆然として息を吐いていると、理音が腰を浮かせて呟いた。

「これが、快感の先にある快感ですわ——ご堪能いただけましたか？」

そう口にした彼女の顔は、これまでよりもさらに大人びて見える。自分の知らないなにかを知っていたこと、それを上から目線で示され、教えられたことで、彼女との圧倒的な格差を、意識に刻み込まれでもしたような心地だった。

「さて——本日の施術はいかがでしたでしょうか、充さん？ もしお気に召されたのであれば、またいつでもご来店くださいませ。将来の店長候補ですから、無料で最上級のサービスをお約束いたします……もちろん、当店に移られてからでも、ご遠慮なく♥」

彼女はあくまで、恭しく充を迎えようとする——という立場を崩そうとはしない。だがそのやり方は、彼女生来のスタンスなのであるう、支配する立ち位置のものだ。

店を移ろうという気持ちはない。けれど充は、理音やこの店のスタッフから与えられた極上の快楽を知ってしまい、それに溺れる快感まで覚えてしまった。

（こんなっ……こんな、すげえの……っ……忘れられるわけ、ないっ……）

自分の心に支配の第一歩を刻まれた、そんな印象を拭い去ることができない。理音の尻下に敷かれたまま、充は敗北の快感という媚毒を、心ゆくまで堪能するほかなかった。

「暴れすぎですよお、先輩……おとなしくしないと、ギューッてしちゃいますよ？」

そう言つて、静菜のペニスを踏みつける力がさらに強くなると、腰の動きはおとなしくなるどころか、ますます激しくなつた。体重をかけたまま足を上下に揺すられると、濡れそぼつた足裏にペニス全体が踏み擦られ、激しいディープロートを受けているような快感が奔り抜ける。精液を吸い尽くさんとする、強烈な咽喉の吸いつき——それを足裏で与えられていることに驚愕しながらも、充はいよいよ我慢の限界を迎えさせられていた。

「んはっ、あふううつつ……し、静菜ああつ……も、おおつ、無理いつつ……」

「あ、限界ですか？ もつたいいいですねえ、まだ五分も経つてないのに♪」

二度の射精を終えていながら、まるで持たない早漏ペニス——言外にそう罵られていることに気づき、恥辱の快感が肉棒を襲う。もちろん、それで静菜が責め手を緩めてくれることなどなく、彼女は嘲笑を湛えたまま、さらに激しく足を揺さぶつてきた。

「ま、いいですけどねー。ご褒美ですし、三発目も脚抜きしたげますよ。ただし——」

瞳を細めた静菜が、唇を歪め、冷たく囁く。

「射精するときは、私の脚に告白しながらお願いしますね♥ ああ、本格的なのじゃなくつて、ただ大好きうってだけでオッケーですから♪」

「なっ——そ、んなっ……んくううつつ!!」

思いもかけない命令に戸惑うも、躊躇つた瞬間、彼女の足が巧みに滑り、土踏まずに亀頭を包み込んだ。濡れた布地のおかげでピタリと密着はするものの、刺激はあまりに緩

く、極限状態のペニスにとつては、焦らすような切ない快楽だった。その切ない快感を連続で与えられた結果、充はたちまち命令を受け入れ、承諾の嬌声をもらす。

「うっああああっつ、わかつ……はひやつつ！ わかつた、からあつつ！」

だがそれは、焦らしに耐えかねたわけではなく、むしろ逆——その弱い刺激ですら射精してしまいかねないがために、より強い快感を求めている屈服だった。緩やかな刺激で暴発してしまう、不完全燃焼な射精では、あの目も眩むような満足感は得られない。そのことに怯え、プライドをなげうってまで、年下の少女に足コキをねだってしまう。

「なにが、わかつたんですかあ？」

「い、言うつつ……好きって言うからああつ！ だからっ、ちゃんと踏んでつつ……踏んでくれつつ、ああああっつ！ 踏んでくださいいいっ！」

懸命に腰を持ち上げようと、静菜は足を引いて、そこで自慰をすることさえ認めてくれない。だから充はこうして、恥も外聞もなく泣き叫び、刺激を求めるしかなかった。耳元で碧子が呆れたようなため息をもらすのを聞き、消え入りたくなるような羞恥を覚えるものの、恥ずかしいおねだりはやめられない。何度も声を上げ、腰を突きだし、足での愛撫を欲してしまう——その状況がたまらなく屈辱で、たまらなく気持ちよかつた。

「ふふっ……本当に仕方のない、ド変態マゾですねえ、先輩は……」

充の男性器のことを、本人以上に知り尽くしていると言っても過言ではない支配者——否、所有者と呼ぶべきか。男の性欲と意思を手の平で転がし、弄び、嗜虐の笑みを浮かべ

る後輩少女は、そんな先輩上司の言葉と態度にクスクスと笑いをこぼしながら、ニーソックスをゆつくりと脱ぎ下ろしてゆく。

「それじゃ、たつぷりナカにもらさせてあげますねえ——えいっ♪」

「え——んあつふううつつ!!」

ただし、脱いだのは踵までだ。長い靴下を踵まで脱ぎ下ろした静菜は、そのまま足裏を下腹部まで滑らせ、半脱ぎ状態になったソックスの履き口に、亀頭の先端を滑り込ませる。

(なんつ、これえええ……な、膣内<sup>なか</sup>、につ……じゃ、ないつつ!!)

そんな馬鹿など思うのに、ペニスを包み込んだのは紛れもなく、性器を思い起こさせるほどに熱く、柔らかな刺激だった。幾度も味わった、蕩けるような媚肉に満たされた碧子の蜜壺と比べても、ほとんど遜色がない。愛液のようなローションは体温によって温かく保たれたまま、ソックスの中で泡立ち、淫液のようにペニスへ絡みついてくる。濡れた生地と柔らかな肌という二つの感触は、それぞれが異なる刺激でペニスを押し潰し、舐め上げながら絡みつき、扱き上げるといふ、淫壺のような甘い快楽をもたらした。

「んあつ、はつ、んふううつつ……ほおら、奥までえ——挿れちゃいます♥」

ズリユリツツ——と音を響かせ、肉棒がさらに深く挿入させられる。踵が肉竿を撫でて根元まで滑り降り、それに合わせて靴下の先端へ埋まった亀頭には、ソックスの内側で生足の指先が纏わりついてきた。たつぷりのローションを絡めた静菜の足指は、その一本一本が、膣内の肉襞と変わらないほど熱く蕩け、肉棒を包み込んでくる。

「おおっ、ほおおっ……おううんつつ!? くあつ、あはああつつ!」

セックスのように無理やりペニスを垂直にすることなく、勃起して身体と平行になった状態のまま、肉壺と交わらないほどに蕩けた淫褻の坩堝るぼへ挿入する刺激——それを受け取った瞬間、電流でも流されたかのように背筋がゾクゾクツツと痺れ、官能が弾ける。

（あつ、あつつ……あああああつつつ! こん、なつ……無理つ、出るううつつ……）

足裏とソックスなどではない、それは間違はなく腔肉だった。射精を堪え続け、すぐにももらしてしまいそうな極限状態で味わう、極上の性器そのものという快感に包まれた肉棒は、瞬く間に限界を飛び越え、足に包まれたまま大きく爆ぜる——。

「——告白、忘れないでくださいね♥」

「はあつ、んんんうつつ……す、好きつつ、好きだつ……ですつつ、好きいいつ……」

射精の直前、心へ滑り込むように告げられた彼女の言葉に、もはや充は抗おうなどとは考えられなかった。

「好きつつつ、好きだああつつ! 静菜あつ……好きつつ、静菜の脚いいつつ! 大好きだつつ、静菜ああつ……あつつ……イクツツ、好きつつ、イクううつつ!」

——ドクドクドクツツ、ドビウルウウウウウウウウツツ! ビクビクンツツ、ビュルツツ、ドブドブツツ……ビュクンツツ、ドピユツツ、ドプツツ、ドクンツツ!

自分がどれほど恥知らずなことをしているかなど、もはやどうでもよかつた。それどころか、恥知らずな告白と射精をしているからこそその快感だと思えば、意識して告白の言葉

を叫び、足と靴下で作られた疑似性器の膣内へと挿入を繰り返してしまおう。

「はあっ、んつくううっ……好きっ、好きですうっ……静菜っ、脚いいっ……」

「ちょ、ちよつと充店長っ……静菜さんではなく、脚の話で——ああ、もうっ！」

戸惑ったように耳元で碧子が囁くが、その内容が聞き取れない。ヌルついたローションの感触と、ペニスに吸いついてくる足裏の柔らかさ、そして肉竿と亀頭を飲み込むように絡みつくローションソックスの刺激によって、意識と思考は奪われていた。

「あはああっ、イクツツ……好きっ、大好きいいっ……静菜っ、もつとおおっ……」

「はいっ、いいですよ……いっくらでも扱いてあげますからねえ♪ 私のオマ○コだと思っ、そのまま膣内射精しまくっちゃってください！」

靴下内で足指が蠢ぎ、肉棒が挟み込まれ、激しく扱き立ててくる。ローションと精液でドロドロになったソックスは、その動きに合わせて卑猥な音を響かせ、充の意識を釘付けにしていた。もちろん音だけでなく、粘液の詰まった肉壺もどきもたらす甘い快感も、罵倒を交えた静菜自身の嘲笑も、すべてが充の心を掴んで放そうとはしない。絶頂で無防備となった充の心に滑り込み、虜にせんと誘惑してくる。

「ほらほら、膣内射精いいですよっ、膣内射精しちゃえっ♥」

「ああああっ、するっ……静菜っ、好きっ……大好きっ、静菜あっ……静菜の脚いい……んっ、はああっ……脚にっ、膣内射精するうっ……あぐっ、イクううっ……」

ペニスの脈動は止まらず、精液の噴出も止まる気配が見えなかった。腰を振り立てるた





び、脚を揺さぶられるたびに肉棒が痺れ、快感とともに白濁が噴きだし、靴下内を——静菜の生足を汚液塗れにして、背徳の快感を味わわせてくる。

「んっ、あっっ……すっごい、熱くて濃厚なの……あんっ♥ こんなに勢いよく、ビュクビュク吐きだしてっ……童貞じゃなくなってるくせに、オマ○コと足裏の区別もつかないんですかっ？ それとも、私の足がオマ○コくらい気持ちいいんですかあっ？」

「あうっ、ぐっ……うっ、あああ……そ、うっ……ぐっ、イクツツ……」

快感とともに自分で吐きだした好きという言葉が、静菜という存在を大きくしていた。冷静であればまだしも、快感に蕩かされた状態では、彼女の言葉を否定することなど考えられない。ペニスを駆け上がる快楽に溺れながら、靴下内に腰を突き上げ、頭に流れ込んでくる言葉をオウム返しのように肯定してゆく。

「気持ちいいっ、静菜っ……静菜の脚っ、静菜っ……ああっ、好きいいいっ……んっくあああっ！ オマ○コと同じくらいっ……気持ちいいっ、最高っ……ああああっっ！」

「……そ、そうです、か……ほ、本当にしようがない変態ですね、先輩はっ……♥」

熱烈な愛を訴えながら、靴下内への射精を繰り返す充——その様を見下ろし、静菜も顔を真っ赤にして微笑んでいるのだが、充はそのことに気づいていなかった。代わりに、背後で抱き締めている碧子が、般若のような形相になり、静菜を睨みつける。

「——静菜さん、やってくれましたね……まさか、こんなタイミングで仕掛けてくるなんて、思ってもみませんでしたよ……ふっ、ふふっ、うふふふっ……」



震えの消えた、少し冷やかな声で理音が囁き、跨がっていた彼女の気配が遠のいた。アイマスクを外されると、一気に差し込んできた光に目が眩む。

場所は理音の言った通り、園内のエステ施術施設らしい。寝かされたベッドは施術台、そして周囲には見覚えのあるスタッフたちが並んでおり、彼女たちからも辱めを受けていたのは間違いないようだ。一枚の布地を巻きつけたような、あまりに扇情的な理音の水着姿を始めとし、女性陣はみな、淫猥な水着に身を包んでいる。

布地の極端に小さいマイクロビキニ、V字のラインで身体を隠すスリングショーツ、マニアックな少女体型のスタッフが着用する旧型スクール水着——等々。

そんな格好で嬲られていたのかと思うと、想起される快楽と羞恥にまたもペニスが跳ね、甘い波が股間から全身へと広がってゆく。その刺激に身体が蕩けそうになりながらもなんとか堪え、拘束されたままの腕で身体を起こそうとした——そのときだった。

「よくできましたね——充店長♥」「ふふっ……惚れ直しちゃいましたよ、先輩♥」  
「え——なっつ!？」

聞き慣れた声、見慣れた姿に言葉を失う。そこに立っていたのは紛れもない、充の支配者であり同僚の二人——碧子と静菜だった。

「な、な、ななっ……なな、なんっ、でっ、でで……ふふふ、ふた、ふたたた……」

動揺のあまりまともに口も利けないでいると、その隙に満面の笑みを浮かべた静菜がベツド脇まで迫り、飛びつくように抱きつき、押し倒してくる。

「いいんですよ、いまは無理に話さなくても……考えなくても……んっ、ちゅっ♥」

愛らしい笑顔が眼前に迫り、それに魅了される間もないまま唇を塞がれ、柔らかな舌が口腔へ滑り込んだ。状況が把握できないながら、甘い唾液の味に舌を掬め捕られた瞬間、ペニスが再び射精を求め、ズクンツと疼きだす。

「んちゅっ、じゅるっ……ぐじゅっ、ちゅばあ……じゅるるっ、んちゅううっ♥」

「んあっ、はっ……ひっ、ひじゅっ、ら……あむっ、んぐうっ……」

説明を求めようとするも、すぐさま口を塞がれ、身体のほうは無意識に腰を振り始めていた。水着姿の彼女の下腹部に龟头が擦れる、その刺激だけで果てそうになった充の頭の中は早くも、眩い快感の光で明滅させられてゆく。そんな状況で――。

「賭けはこちらの勝ちになりましたね、理音さん？」

「……き、きっかけは私なのですから、五分五分ではありませんことっ!？」

その霞んだ頭へ響くように、碧子と理音の会話が飛び込んできた。

（ま、待て、いまなんて……賭けて、言ったよな……？ まさか――）

無理に考えるなど言われたものの、この状況とその会話を合わせれば、話の流れは勝手に見えてきてしまう。

（まさかこれ、最初から……三人で、全部仕組んで……あうっ、うくううっ……）

充の思考を遮るように、瞳を細めた静菜がこちらを見つめたまま、積極的に舌を絡め、吸い上げ、口腔を穿るように弄ってくる。ゾワゾワと快感に背筋が痺れ、弛緩した身体が

括約筋を緩ませ、たちまち尿道を開かされていた。

「んぶあつ、あむう……ちゅばあ……もうひゅぐ、れふねえ……ひえんばあい♥」

キスをしながらも、充の反応や気配だけで絶頂を察したように、静菜が囁く。

「んう……ちゅつ、ちゅううつつ……ふあつ♥ ふふ、こんな勃起チンポ抱えて、よく断れましたよねえ？ 先輩取られちゃうかと思つて、すつごくドキドキしました♪」

（それ、じゃ……んぐつ、んむううつつ……や、やつぱりい……ひぐつつ……）

煽るような、馬鹿にするような、それでいて慈しみを秘めた声に快感を注がれながらも、少し離れた二人の会話に耳を傾けるため、充は必死に射精を堪えていた。

「ですが、賭けの内容は確認したはずですよ？ 充店長が理音さんを選んだなら、わたくしたちは移籍を認める——ただし屈しなければ、もう二度と引き抜き工作をしないと」

「つつ……そ、それは、わかつていますわっ……女に二言はありませんっ！」

妙に男らしい啖呵を切った理音に、碧子は満足げな笑みで頷きを返す。

「結構です……まあ、そのためにわざわざ誘いに乗らせていただき、ここまで足を運んだのですから。店長はまるで気づいていらつしやいませんでしたけれど」

「あぐつ、んむうつつ……ふあつ、はあつ……そ、れは——」

それはやはり、この旅行が仕組まれていたということだ。

「んぢゅるうつ、ちゅばあ……んふうつつ……まあ、誘われた時点では確信がなかったんで、理音さんに確認したんですけどね。で、これ以上ちよつかいだされるのも困りますし、勝

負することにしたんですよお♥ あゝむっ、くちゅっ、ちゅぷう……」

(……冷静に考えれば、そりゃそうだ……あんな近くで俺が誘拐されてるってのに、言い争いしてるくらいで気づかないわけないだろ……あれ、ないよな……?)

本気で言い争いをしていて気づかなかった、という可能性も否めないが、充がなにも気づかず誘拐されるよう、言い争うフリをしていたのだろう。

「ひ……れっ……んむっ、ちゅばっ……くっふううっ……二人とも、ひどいなっ……静菜も、はむっ、んんうっ……ぷあっ、はっ……なんで、言わなかったんだっ……」

「ええり? 言うわけじゃないですか♥ 先輩の忠誠心を試す、いい機会だったわけですしい……無神経に、元カノからもらったチケットで旅行に誘うような男には、いい薬だったと思いますけどお?」

「も、元っ……違うっ、俺と理音さんは、そういうんじゃないからっ!」

静菜の指摘に思わず顔を赤くさせると、ムツとしたように眉根をひそめ、静菜は顔を遠ざけてスツと立ち上がる。スラリと伸びる脚線美に思わず見惚れてしまうと、その脚が目の前で上げられ、充の眼前にまで迫った。

「……まあいいですけどね。それに、二人とも——っていうのはイマイチでしたけど、とにかく立派なことが言えたわけですし、そのお口にもご褒美あげないとですよね」

「え、いや、あの……いまのキスで、十分ご褒美——んぐっっ!!」

言い終わるより早く、彼女の足先が口を開いて捻じ込まれ、舌が指に挟まれる。園内で

はサンダルを履いていたためか、しつとりと湿った汗のしょっぱさと、ほんのりと蒸れた甘酸っぱい臭気がツンと喉奥に突き抜けた。

「ふあつ、りふお……おむつ、んじゆるうつ……ぐぶつ、んぶううつ……」

「ご褒美ですよ、だつて先輩——私の脚が好きなんですよね？ 私とするキスももちろん大好物でしょうけど、好きな脚とのディープキスも好きだろうな〜って♥」

その指摘通り——ペニスをそうされているような足コキの動きで、唾液を絡めながら舌を抜き上げられた瞬間、ひと際大きくペニスが膨らみ、跳ね躍る。

「うそ……足舐めさせられて、チンポおつきくしてる……」  
「そういう趣味もあつたんだ……うわあ……♥」「触つてないの？」  
「冗談でしょ……」  
「そんな男、いるわけない」

顔見知りのスタッフたちが、いつものような嘲りではなく、戸惑いと好奇を含んだ声で囁いた。蒸れた足で舌を扱かれ、その味を堪能させられるという、あまりに恥辱的で情けない扱い——それを受けていることもさることながら、快感まで覚えている姿を見られているという状況に、凄まじい快感が込み上げる。

（見られ、てるっ……みんなに、俺っ……俺の、最低などこおっ……んぐううつ！）

恥ずかしいと思えば思うほど顔が熱くなり、表情が蕩け、ペニスが切なく跳ね震え、先走りがダラダラと溢れ落ちた。それを指摘してはしゃぐ周囲の声が、自分をどこまでも矮小な存在として自覚させ、さらなる羞恥を望まされてしまう。

（や、ばいっ……このままっ、イツ……イキ、たいっ……イキたいいっ……）



知らず唇を伸ばし、静菜の足指へむしゃぶりつき、チュウチュウと音を立てて吸い上げてしまっていた。挟まれたままの舌をくねらせ、彼女の指を丁寧にしやぶり、甘酸っぱい汗味を吸り上げ、喉まで鳴らして飲み下す。そんな姿を頭上から眺め、ニヤニヤと見下ろしている静菜は、周囲を煽るように呼びかけた。

「先輩はですね、チンポに触られなくてもイけちゃう、超ド変態なんですすよお♥も  
うこのまま、足にキスしてるだけでもピュッピュできちゃうと思いますけど——」

そこで軽く言葉を切り、チラリと視線を向けた先で、碧子が嫣然と微笑む。

「今回はご褒美ですからね……もう少し気持ちいいのを味わって、今日の一発目を思う存分吐きだしていただきましょう。充店长、皆さんにも見ていただきましょうねえ？」

「ひゃ、りをつ……みろりこ、ひゃ……んみゅうつつ?! ひゅおつ、ほおおつ……」

彼女の手が尻房を撫でるだけで、条件反射のように脚が跳ね上がり、腰が浮いた。無防備な尻谷間とヒクつく菊皺を晒す、完全に屈服した牡の体勢——そのポーズをすぐさま披露したペットを褒めるように、碧子はクスクスと笑いながら充の尻を撫でる。

「はい、お利口さんですね♪ そのおねだりポーズ、すっかりクセになっちゃいましたねえ……うふふつ、それでは——いつものご褒美、差し上げましょうか♥」

言いながら彼女が取りだしたのは、どこに隠し持っていたのか、真っ白なT字型に近い形状の医療器具だ。男の前立腺を刺激するためだけに存在する、考えようによっては淫ら極まらないその道具に、碧子は自身の唾液をたっぷり垂らしてゆく。

「んはああ……んええ、れろおおお……ふふっ、しっかり濡らしてあげないと、充店長もイタイイターイなっちゃいますものねえ？ 大丈夫ですよ……うふふふっ♥」

大勢の前で幼児を論すような口調で囁かれ、無上の羞恥が込み上げる。けれど、待ち受ける快楽までが同時に想像され、精臭振り撒く肉棒がビクンビクンと跳ね躍っていた。

「散歩に喜んで尻尾を振るワンちゃんみたいですね、充店長……今度、本当に散歩に行きませんか？ 裸になって、首輪とリードをつけて……こ・こ・に、尻尾をつけて♥」

「はひっつ、んあつ、んぶっつ……んぐうううんっつ?! んふううううっつ!」

碧子の唾液塗れになった白色の器具——その硬い感触が肉皺へ押しつけられた瞬間、たちまち充は表情を崩し、欲望に溺れきった牡の顔を晒して喘ぎを上げてしまう。それを遮るように、ニヤニヤと見下してくる静菜の足が舌を摘み上げ、その表面を舐め回すように擦り立てた。言葉を遮られながらも充は歓喜と肉悦に嬌声をもらし、ペニスをヒクつかせ、ますます腰を高く掲げてしまう。無様極まりないその痴態を見つめるスタッツたちの、息遣いや吐息が耳に響き、見られている実感がどこまでも快感を煽り立てた。

「ほおぐら、入ってっちゃいますよ？ 充店長のキツキツ開発途上ケツマ○コ、わたくしがすぐメロメロにしてあげますからねえ……うふふっ♥」

充の尻穴を蹂躪することが嬉しくてたまらないといった様子で、碧子が声を上擦らせながら、手に力を込める。絡みついた唾液がヌチャヌチャと音を立て、肉皺に染み込み、括約筋を蕩かそうとしているようだった。

「あはっ、お口パクッてしましたよお、充店长？ 前立腺まで、もうすぐですからね♥」  
押しつけられる硬い器具の感触に負け、尻穴が綻ぶように開く。幾度となく碧子に穿られたそこは、もはや彼女に触れられるだけで敗北宣言し、開門してしまう、情けない砦だった。太ももを押さえる指が僅かに動くだけで身体が弛緩し、期待に腸汁を滲ませ、肛門を緩ませてしまう。その小さな割れ目を見逃さず玩具が食い込み、少しずつゆつくりと、硬い器具が腸内を蹂躞するのだ。

充の反応を愉しみ、弄ぶように彼女が力を込める、そのペースに合わせて――。

「は〜い、ズプウウ〜〜ツツ♪ ズブツ、ズブツ、ズプウウ〜〜ツツ♥」

「はあっ、あっ、あうううっ……んはああっ！ はあんっ、あっ、ああああっつ！」

緩急をつけたほんの僅かのストローク、その小刻みな挿挿を繰り返され、充の腰は真上を向くほどに浮き、尻穴はどうしようもなく開ききってしまう。

（やあっ……ば、ひっ……いぐっ、これっ……もおおっ……無理っ、いいっつ……）

「あら、あらあら♪ 力入れてないのに、ご自分で飲み込んでいっちゃうんですか？」

指の三本程度なら容易く咥え込んでしまいうるほどに、大口を開いて器具にむしゃぶりついた尻穴が、腸粘膜の蠕動と肉皺の窄まりで、硬い感触を吸い上げてゆく。一旦、淫らな咀嚼が始まってしまうと、もう自分の意思ではどうにもならない。

（あぐああっつ……は、入って、くるっつ……硬いの、奥にいいっつ……）

自然な身体の反応と快楽への期待が、覚え込んだ快感の貪り方を再現し、器具を奥へ奥

へと誘っていた。数センチという距離で、声を弾ませながらそれを見物している碧子はもちろん、周囲のスタッフたちや理音までが、フラフラとした足取りで近づいてくるのがわかる。大勢の視線が釘付けになっている尻穴は、どうにもならないほどの興奮に震え、ヒクつき、リズムカルに括約筋を締めつけ、とうとう器具を根元まで咥え込んだ。

「ほおおんっつ……おっ、はあっ……んくううう——っつ!!」

医療器具の用途そのままに、咥え込んだ硬い感触が充の快楽のツボを——前立腺を鋭く押し込む。その瞬間、電流でも奔ったように腰が大きく跳ね、視界が眩んだ。

「自分で食べちゃうなんて、お利口さんですねえ♪ それでは——我慢もできないでしょうから、きちんと言うてください♥ おもらし前の礼儀、お教えしましたよね？」

碧子がそう告げるのに合わせ、ニヤリと笑った静菜が舌から足を離す。もちろん、愛撫を緩めたり辱めをやめたりしたのではなく、自由に口を利かせるためだ。代わりに彼女の足は充の顔を踏みにじり、柔らかく温かな感触と蒸れた足裏の匂いで快感を煽り、己の恥辱的な立場と状況を知らしめてくる。

絶頂の瞬間、真っ白に染め上げられた頭の中に、それら肉悦が一気に流れ込み——充は欲望を解放させながら、教え込まれた絶頂宣言を声高に叫んでいた。

「あひいいいっつ?! んいっ、ぐっつ……あいいいっ、イグッツ、イクうううっつ、んっはあああっつ! あああっ、変態いいっ、変態射精っ、見てくださいいいいっつ!」



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

二次元ドリームノベルズ

愛蔵版  
ファンブック

戦うヒロインを屈辱させちゃう  
かなり過激な  
陵辱系ライトノベル!

フリーダム120%!?  
ジャンルはわからない  
ドキドキクラブ!

呪詛嬢の師

日常に密着したエロス、  
リアルな舞台設定で送る  
官能小説シリーズ!

女刑事美優

美優は自慢の breasts

リアルドリーム文庫

あとみっく文庫

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

タイプ?

異世界で  
手に入る  
宝珠

二次元ぷち文庫

あの人気作品の  
外伝作品もあっ!!  
電子書籍しか読めないチチノベル

小説家になろうの男性向けサイト  
から書籍化!!

ドキドキクラブな  
ハイレム系  
ライトノベル!

二次元ドリーム文庫

姫騎士 クラスメイト!  
ビギニングノベルズ